

今昔物語集

袋綴 楮紙 26×18.4 種
展示個所翻刻

四十四丁 裏

トナム語り傳へタルト也

玄象琵琶為鬼被取語第廿四

今昔村上天皇ノ御世ニ玄象ト云琵琶俄ニ失ニ

ケリ此ハ世ノ傳ハリ物ニテ極キ公財ニテ有ル

ヲ此失ヌレハ天皇極テ嘆カセ給テ此ト止シこと无

キ傳ハリ物ノ我カ代ニシテ失ヌルことト思シ嘆

カセ給テ理也此ハ人ノ盜タルニアラム但シ

人盜取ラハ可持様ナキことナレハ天皇不吉思奉

ル者世ニ有テ取テ損シ失タルナメリトリ被疑

ケル而ル間源博雅ト云人殿上人ニテアリ此人

管絃ノ道タル人ニテ此玄象ノ失タルことヲ思

ヒ嘆ケル程二人皆靜ナル後ニ博雅清涼殿ニシ

四十五丁 表

テ聞ケルニ南ノ方ニ當テ玄象ヲ彈ク音アリ極テ

怪ク思ヘハ若シ僻耳カト思テ吉ク聞ニ正シク

玄象ノ音也博雅此ヲ可聞誤キことニ非ス返々驚

キ怪ムテ人ニモ不告シテ欄窺ニテ只一人奮計

ヲ履テ小舎人童一人ヲ具シテ衛門ノ陣ヲ出テ

南棟ニ行クニ尚南ニ此音アリ近キニコソ有ケ

レト思テ行クニ朱雀門ニ至又尚同シ様ニ南ニ

聞ユ然レハ朱雀ノ大路ヲ南ニ向テ行ク心思

ハク此ハ玄象ヲ人ノ盜テ高樓觀ニシテ密ニ彈

ニコソ有ヌレト思テ急キ行テ樓觀ニ至リ着テ

聞クニ尚南ニ糸近ク聞ユ然レハ尚南ニ行ニ既

ニ羅城門ニ至リヌ門ノ下ニ立テ聞ニ門ノ上ノ層

作品解説

全三十一巻（うち3巻が欠）、千を超える話からなる日本最大の説話集。その全ての説話が「今は昔」から始まり、そのために「今昔物語集」と呼ばれる。撰者、成立事情など一切が不明。平安末期成立。天竺五巻、震旦五巻、本朝二十一巻からなり、「日本靈異記」などの日本仏教説話はじめ、「因果経」などの、インド・中国の文献から引用したものが多く、信仰を説いた仏教説話集ではあるが、多彩な説話の面白さが評価され、芥川竜之介はじめ、後世の文学に影響を与え、題材にもなった。

展示個所解説

二十四巻より。平安時代の高名な音楽家・源博雅の物語のひとつ。宮廷から「玄象」という琵琶の名器が盗まれ、ある晩博雅がその音色を聞きつけ、羅城門へ赴くという場面である。「博雅此ヲ可聞誤キことニ非ス」といった記述に、博雅の音楽家としての能力を思わせられたり、夜の京を供ひとりのみを連れて行くところに、博雅という人の性格を感じさせられる。物語はこの後、羅城門の上で玄象を弾いている「鬼」に対し、博雅が玄象の返却を求める場面になる。「鬼」は、博雅の求めに応じ、姿を見せることなく、縄で玄象をおろし、博雅に返却する。その後、まるで生きもののようだという玄象の後日談が語られ、奇異の事であると、結ばれる。なお、これと類似した話は、「古今著聞集」や「十訓抄」などにも見られる。

諸本解説

写本とともに収められていた長野管一氏の原稿によると、奥書には「於藏本」とあるが、「所藏本」の誤りであると言うことになる。この本の奥書に天明二年十二月三日書写し終わったとあるが、そのことが「所藏本」と一致するため、親本の奥書をそのまま移したものであると考えられている。そのため、奥書にあるよりもさらに年代は下ると推察される。本文から丹鶴叢書本系と思われているが、誤脱が多いことや、送り仮名等の省略されていることから見て、時代はさらに下ると見られる。

翻字作業をめぐる

他の多くの写本と違い、今の本とほとんど変わらなかった。想像していたよりも読みやすく、また、古本に対して持っていたイメージよりも、とても綺麗だった。たいへん貴重な経験になったと思う。（岡野真介・寺島友美子）

博雅の人物像？

「今昔物語集」では、玄象のエピソードの外にも、こんな話が収められている。

「ある時、博雅は、逢坂の関の盲人が琵琶の名人だと聞き、彼の弾く琵琶を、なんとかして聞いてみたいものだと思った。ところが、盲人の家があまりに見苦しいので、どうにも訪ねられずにいた。それでも、琵琶の秘曲、流泉・啄木を知っているのは蟬丸だけなので、その秘曲が永遠に絶えてしまうと思った博雅は、ある夜、逢坂の関へ出かけて行った。しかし蟬丸はその曲を弾かなかつたので、それから三年間、毎晩通い続けた。そして三年目の八月の十五夜、興味のある晩である。蟬丸の何気ない独り言に博雅が応え、それをきっかけに二人は意気投合し、蟬丸は博雅に琵琶の秘曲、流泉・啄木を伝えた。博雅は喜び、夜明けに都へ帰って行ったという」

そんなふうに、数々の説話に登場し、今では「陰陽師」ブームとともに、映画やドラマ、漫画や小説にも登場する源博雅だが、実際はどんな人物だったのだろうか。

源博雅（918～980）は、「博雅三位（はくがのさんみ）」とも呼ばれ、醍醐天皇の第一皇子克明親王を父にもつ貴人であった。説話などでも、雅楽の達人として語られるが、実際の博雅も、有名な音楽家だったらしい。藤家流の祖とも言われ、今に残る「長慶子」という曲を作り、966年には、村上天皇の勅命により、「新撰楽譜（長秋御竹譜）」を選進している。

さて、そんな音楽の名手・博雅であるが、「大鏡」には、こんなエピソードがある。

「宮中で管弦の御遊びがあるとき、管弦の名手である藤原敦忠卿が用いられたが、その方の死後は、博雅三位が用いられるようになった。ところが、都合が悪いときは参内せず、“これでは今日の御遊びが中止になってしまう”と、度々使者が出された。そして、ようやく現れる博雅を見て、“敦忠卿のご存命のころは、博雅三位などが重用されるなど、思いもよらなかった”と、古参の者たちは嘆いたという」

また、藤原道長は、ある人を評して「あの人は、才能はある人なのだが、あの怠慢の様子は、まるで博雅のようだ」と言っている。どうやら、音楽家としては一流だったようだが、いわゆる「変わり者」だったようだ。

参考文献

「日本古典文学全集 今昔物語集」 小学館

「日本古典文学全集 大鏡」 小学館

古今著聞集

袋綴 楮紙 27. 3×20種 江戸期写

展示箇所補綴

五十九丁 裏
給けり拜舞はなかりけりゆへ有けりにや
龍吟抄ニハ堀川右府頼宗也云々
いつれの比の事にか大宮右大臣殿上人の時南殿のさくら
さかりなる比うへふしよりいまだ装束もあらためずして
御階のもとにてひとり花をななめられけりかすみわたれる
大内山の春曙のよにしらす心すみければ高欄によりかゝ
りて扇を拍子に打て桜人の曲を数反うたはれるに
多政方が陣直つとめて候けるか歌の声をきゝて花の
もとにすゝみいてゝ地久の破をつかふまつりたりけり花田狩
衣袴をそきたりける舞はてゝ入ける時桜人をあらた
めて叢山をうたはれけるは政方又立帰て同急を舞ける
六十丁 表
をはりに花の下枝を折てのちおとりてふるまひたりけり
いみしくやさしかりける事也この事いつれの日記に見えたる
とはしらねとも古人申伝て侍り
博雅卿は上古にすくれたる管絃者也けりむまれ侍ける
時天に音楽の声きこえけり其比東山に聖心上人といふ
人有けり天をきくに微妙の音楽あり笛二笙二箏
琵琶各一鼓一きこえけり世間の楽にも似す不可思議に
目出たかりければ上人あやしみにて庵室を出て楽の声を
付て行ければ博雅のむまるゝ所にいたりけりむまれを
はりて楽のこえはとゝまりぬ上人他人にかたる事なし

作品解説

二十卷三十編七二六話から成立つ説話集。成立は建長6年(1254年)10月17日(鎌倉時代)。作者は琵琶・詩歌・絵画などに通じていた橋成季・清少納言の夫であった権願光の末裔。和歌「管弦歌舞」など自分が興味を持っていたジャンルから筆を進めたが、そのほか「他の物語」にも及んだという。全体的に平安時代「古」の話が多く、王朝貴族の懐古色が濃いが成季が生きた鎌倉時代「今」の説話も三分の一を占めている。王朝貴族の末裔——橋成季が今も昔も粋も無粋も注ぎ込んだ書物である。

展示箇所解説

「いづれの此の事〜」から「古人申し伝えて侍り」は二四三段の「大宮右府俊家唱歌に多政方舞を仕る事」である。大宮の右大臣(藤原俊家・道長孫・一〇一九〜八二)がまだ殿上人(四位、五位相当)の頃、ひとり桜を眺めているうちに、良い心地になり桜人(催馬樂の曲名)を歌い始める。そこに声を聞いてやって来た多政方(右舞の名人・?〜〇四五)が現れ、地人の破を舞い始める。政方が破を舞った後、俊家桜人の替りに藁山(同じく催馬樂)を歌う…それを聞いた政方が続いて地人の急を舞うのであった。夜桜の下で行われた平安王朝の雅を伝える逸話である。

★地人(舞樂の曲名)は破と急から成り、破は桜人・急は藁山に合わせて舞う事が出来た。

「朝朝御は〜」から「語る事なし」は、二四四段「朝朝三位生誕の時、天に音楽ある事並びに高義双輪の君と喚びたる事」であるが、この展示で前半の「朝朝三位〜音楽ある事」、までの展示である。雅楽家として著名な源朝朝が生まれた折、東山に住む聖心上人が天から微妙の音楽がするのを不思議に思い夕に出てみたところ、行き着いた場所が朝朝が生れた所であった。後に音楽の才を開花させた朝朝につながる、神話的な話である。

諸本解説

永積安明氏の分類によると甲門第一類となる。これに付いては①巻十四遊覧篇中大井川行幸和歌序を附載。②七二一段、「にこりなき御代にあひ見る角田川みける鳥の名を尋ねつつ」の歌の後に「前の三河の守部兼直上る」が記され、跋文と「朝朝大夫橋成季」の名前があり、更に七二二段唐土塞叟が馬の事以下、五つの説話を持つ形式を採っている等の理由が挙げられる。ただ狂子を狂子と書くなど、全体的に誤写も少なくない。

翻字作業をめぐって

今回初めてガラス越しではなく何百年と経っている写本に直接触れさせて頂く事が出来ました。写本には虫食いもあり、汚れもありますが何よりも書写した人の筆遣い・息づかいが生々々々実感出来ました。翻字や内容紹介で、字や古典が分らない方々にもこうした写本独自の息吹を感じてもらえれば幸いです。(山下絵美・松島千鶴)

博雅と箏篋

★古今著聞集の中には、同じく源朝朝につながる話はいくつかある。その一つが四二九段「盗人・博雅の三位箏篋を聴きて改心の事」である。自邸に盗人が侵入した朝朝は、板敷の下に隠れる。盗人が帰った後の家を見ると、そこには一つの箏篋の他何も残されていなかった。何を思ったか朝朝は一つ残された箏篋を吹き始める。ところが、その箏篋の音が思わぬ効果をもたらしてくれるのである。遠くまで響く箏篋の音を耳にした盗人は、この朝朝の音に感じ入り改心して盗んだ品々を博朝に返していったのである。

枕草子の中で箏篋は、「いとかしがましく、秋の虫をいはずば、蠻虫などの心方して、うたてけちかく聞かまほしからず。」と清少納言に酷評されている。これに付いて「音楽—源氏物語における横笛の役割」(『源氏物語研究集成第十一巻 源氏物語の行事と風俗所蔵』)の中で利沢麻美氏は「近くで聴いてうるさい音という下手な演奏の典型的なものと云える。」と述べている。又、箏篋の演奏は難しく「音色そのものも音程も非常に不安定であるので、余程熟練しなくては、他人の耳に心地よいものには聞えない。」と言う。箏篋を吹きこなすだけではなく、盗人の心も入替させた博雅の肺腑はこの話が真実かどうかはともかく、この様な話が書かれた位、大変高いものだったはずである。更に利沢麻美氏によると、箏篋が非常に難しい楽器であったため「風流事」としてのみ楽器を扱う上流貴族達にとり、非常に努力を要する箏篋は扱いがわる物であったという。この事が、専門家が吹く楽器とされ、地下人の扱う楽器という認識が持たれる様になった原因である。話を朝朝に戻すと、上流貴族でありながら琵琶、横笛、大箏篋之上手(『源氏物語』)と大箏篋の上手であり、「『教訓抄』八に九六六年(康保三)のころ、良岑行正が大箏篋を吹き源朝朝に伝えその後絶えた」(『日本民族大辞典下』・吉川弘文館 参照)とある様に大箏篋の演奏法を伝えられる程の肺腑だった博朝はまさに特異な存在だったのである。更に言うならばこの箏篋を巧みに吹きこなす事が出来るという事は、他の楽器に言うに及ばずという事だったのでないだろうか。

参考文献

古今著聞集上下 新潮日本古典集成 昭和三十八年 校注者 西尾光一・小林栄治

古今著聞集 日本古典文学大系84

利沢麻美 「音楽—源氏物語における横笛の役割」 源氏物語研究集成十一 源氏物語の行事と風俗
日本民俗大辞典下 平成12年 吉川弘文館 平安時代史事典上下 平成6年 角川書店